

「リーディング」の授業でめざす技能の育成方法の考察

－未知語の推測技能に焦点をあてて－

千菊 基司

本稿は、説明文の読解において、段落構成知識を利用して未知語を推測する力をつける意義を考察し、その指導法の一例を紹介するものである。リーディングの授業において、大量の新出語を前に、部分的な逐語訳を繰り返すのみの英語学習者が、単語を覚えることと段落構成の知識を利用することで未知語を推測する技能が効果的に利用でき、読解活動の質が変わることに気づく。その技能を発揮するためにも、単語知識の獲得の重要性に気づき、学習への意欲が高まると期待している。そのような目的の授業展開方法として、公開授業の指導案を一例に挙げる。

1. はじめに

当校の5年生を対象に、2006年9月に実施した夏休み課題テストの得点状況を概観し、リーディングの授業をすすめる際、何が問題になるかを考えてみたい。

夏休み課題テストは、大きく分けて①単語②聴解③読解④構文の、4つの大問からなるものであった。内容は、①は『システム英単語』（駿台文庫）より約600語を対象に、知識の定着度を測る、多肢選択型空所補充問題。ただし、範囲の60%は1学期の復習であった。②は *Hyper Listening* 中級（桐原書店）の10ページを範囲とした、応用問題。③入試問題から選んだ課題5編の1つを題材にした、オリジナル読解問題。④は『2週間完成英語構文問題集』（日栄社）1冊を範囲に、与えられた語句に一語補って並べ替えて完成させる整序英作文問題。

総合点50点未満の生徒は28人で、4つの大問のうち、35%以下の得点しかなかった生徒が多かったのは①単語（22名）と④構文（17名）であった。総合点60点未満の生徒は30人いたが、35%以下の得点しかなかった大問は、①単語（19名）だけになっていたが、50点未満の生徒と比して、人数的な変化はほとんどないことが特徴的であった。つまり当校の生徒のうち、成績不振の生徒は、構文と単語の学習内容が定着しない生徒である、と言える。また、成績不振予備軍の生徒は、構文はともかく、単語の学習内容が定着しない生徒である、と言える。聴解・読解の大問では、どちらの得点帯の生徒も出された課題に取り組んだようで、平均するとそれなりに成果が出ていたことを考えると、英語学習への動機付けもあるようだ。

したがって、英語学力下位層の生徒は、単語力不足のまま、あるいは単語の知識の定着の重要性を理解できな

いまま時が過ぎ、概要把握や情報を得るような読み方では健闘するものの、細部の理解が要求される精読において行き詰まり、動機付けが維持できなくなるとことが予想される。このような生徒を前に、われわれは何に留意して指導すべきなのだろうか。

2. 読解活動のありかた

「読む」という行為は、知識の獲得を目的とし、読み手は、積極的に書き手に対して問題提起を試み、その回答を行間から推理しながら文章理解に到達する。読解活動は、「キーワード」などから得られた情報を基に文章の情報を予測し、実際に得られた特定の情報を解釈し、その予測が適合したかを検証するプロセスともいえる。どの語がキーワードになるか、などは文章構成の知識や背景知識が活用される（トップダウン）。しかし、情報を得るための文の解釈は語彙・文法知識に大きく依存し（ボトムアップ）、しかもそれらの情報が統合されるかどうかは、文章構成の知識だけでなく、記憶力にも影響される。

Ommagio (1986) は、以上のような読解活動の性質をふまえ、リーディング技能を育てる指導の計画のために、次の5つの段階を紹介している。

(1) 読解前の段階

「ブレンストーミング」活動を用い、キーワードからテキスト内容の予測を行ったり、内容に関連した知識を活性化させる。タイトルや図表を活用するも重要である。

(2) 概要把握・特定情報把握の段階

段落毎に内容をまとめたり、タイトルをつけたり、主題文を探したりする活動が一般的である。理解の確認の

ために多肢選択型問題を作ったり、あらかじめタイトル候補を与えて段落と適合せせたり、フローチャートで文章構成を概観するなどの活動が考えられる。

(3) 精読の段階

単語自体に注目したり、文内・文間の関係に注目させたり、段落間関係に注目させることで、文脈による理解を可能になるよう指導する段階である。

(4) 理解の段階

読解の目的が果たされたかどうかをここで確認する。場合によってはテストも必要になるが、他の技能（話す・聞く・書く）に影響されない、純粋に「読む」技能で答えられるテスト問題を作ることが肝要である。

(5) 技能育成の段階

別の文章を読む時に同じ技能が使えるように、技能の育成を中心に活動を考える。文脈に依存した未知語の推測法・辞書情報の活用法・効果的なリーディング方略の育成などが必要である。

以上の5段階を経れば、なるほど読解力がつくだろう。ただし、それぞれの段階でどのような時間配分をするのか、という点については、対象となる生徒の実態による、ということを指導者は理解しておかねばならない。

3. 読解の「実態」とその弊害の懸念

英語が苦手な生徒の読解活動においては、文章理解は理解できた英文からの情報の集積にとどまり、理解できなかった英文の情報は欠落したままであることが多い。例えば、未知語などの影響で、文の理解が止まったら、そこで理解が終わる。たとえば文章要約においても、わかったところをつなぎ合わせた答案のため、本来解答に含めるべきでない末梢の例なども（制限字数に自分の答案を近づけるために）含めてしまう。また、要約して作成した文章も、あらためて読み直し、文章の内容を想像するという経緯を経ることが少ないため、「珍解答」ができあがる。

目指すべき読解活動では、わからない語や概念があっても、文章構成の知識などを援用し、理解をすすめて、筆者の意図に迫ることを体験させる。理解できなかった部分は、その前後の文脈や全体の趣旨から推測して情報を補いつつ、要約文を完成させることができる生徒の育成を目指すべきである。

これまでの読解指導においては、語彙・文法知識を積み上げることに過度に注意が向けられていなかったか、ということが反省点として挙げられる。高校入門期に、教科書で扱う単語や熟語の数が急増するため、ある一定の時期にそのような傾向が強くなったことは否めないし、また補助教材として、「文法参考書」や「単語帳」も自学用に購入させ、インプットの不足を補うように工

夫することも一般的である。

では、「リーディング」の授業では何を扱うべきか。英語Ⅰや英語Ⅱの授業で扱う英文よりさらに新出単語数が増える。長い「単語リスト」を作って、部分的に逐語訳を頻繁にするだけで終わっていないか、検証が必要ではないか。そして、単語の知識が定着しない生徒は、ただひたすらその逐語訳のみに終始し、段落構成などの知識を利用する段階になかなか至らないのではないか。あるいは、単語を覚えることに終始する「英語学習」に絶望し、英語学習そのものから逃避するのではないだろうか。

段落間関係の違いに焦点をあて、文章構成の種類を解説するような演習問題を含んだ教材も見受けられる。しかし、細部がよくわからないまま「全体」を見せられるだけで、生徒がわかることはディスコースマーカーの意味や使い方くらいではないか。あるいは、段落構成の知識を授けることが目的となっていないか。さらに、文章構成の理解のための手だてとしては、段落のパターンの説明と、指示語の理解のための訓練に時間をかけすぎているか。そして、文章単位での解説では、生徒は筆者の意図をほんとうに理解できているのかという疑念が常につきまとう。

このような読解活動を経験した英語学力下位層の生徒は、各文がわかれば英語はわかるが、難しい概念を英文で理解するために文章中の情報を基に理解する技能は伸ばせられないのではないか。

4. 今年度の指導における取り組み

リーディングの授業では、*Voyager Reading Course*（第一学習社）を使用している。教科書全体が3部に分かれ、第1部には、①段落の中の文と文の関連、②代名詞などの指示表現、③連結表現、④段落構成、にそれぞれ注目させるような文章があり、読解を通じて、それらの知識を活用していけるように構成されている。④では、「例示」「列挙」「因果関係」「逆説・譲歩」と多様な例を挙げている。

2学期の最初の授業では、数回にわたって、この段落構成の知識が、単文・複文の中、あるいは複数の単文間の中でも活かせることを体験するような演習の時間を設け、未知語の推測を意識した読解を、生徒自身ですすめられるようにした（資料は指導案の後に掲載）。このような練習を通じて、未知語に出会って「思考停止」にならず、文レベルで情報を積み上げて、読解をコントロールできるよう力がつくと考えたわけである。

段落レベルでは、教科書の題材以外に、段落構成の知識の活用の有効性を確認できるように、5～6文からなる文章も積極的に活用し、日本語での要約の練習を行っ

た。説明文に典型的な文章構成の文章をとりあげ、例示や言い換えの部分も参考にして、未知語が含まれていても、段落構成の知識を利用し、きちんと主題文を理解できているかを確認する。

文レベル・段落レベルのどちらにおいても、*Reading Power* などを利用し、演習問題を作成した。

5. 公開授業との関連

授業の最初に問題を配付し、約10分間で、教科書第1部で扱われている段落構成のパターンに関連のある、文単位での未知語の推測演習を行う。9月には、「因果関係」「対比・対照」「例示」「言い換え」を扱い、月末の公開授業では、総合的に行った。

英語科学習指導案

I. 題材 *VOYAGER Reading Course* (第一学習社) Lesson 6 Candles on Your Birthday Cake

II. 題材について

- (1) 教材観：この教科書は大きく3部に分かれ、第1部では、段落内の構造や情報の結束の見抜き方、段落構成の特徴などを目標に各課が構成されている。本時の題材については、段落構成について、筆者の主張を効果的に表現するために「逆説・譲歩」の構造に注目させるように編成されている。本文では人間の年齢のとらえかたを、逆接表現で論点を明確にし、実際の「職務年齢」を重視すべきだという主張で結んでいる。
- (2) 生徒観：多くの生徒は英文解釈といえ、単文レベルの日本語への置き換えなら得意だが、段落単位以上で、未知語が含まれたら、なんとなく読んで、という様子である。日本語の読解力が高い生徒が多いため、短めの英語の文章においては、そのような読解で終わっているようだ。
- (3) 指導観：日本語訳できればなんとなくわかってしまう生徒に対し、段落構造の知識を読解に利用することの重要性を感じさせるためにも、できるだけ教科書以外の題材も利用し、読解技能の向上を目指したい。

III. 指導計画 (全3時間)

- (1) 本文の読解活動・練習 (2時間 本時は1時間目) (2) まとめ (1時間)

IV. 題材の評価規準

- (1) 学習した読解方略を進んで用い、意欲的に読解活動に関わっている。(ア. 関心・意欲・態度)
- (2) 文章中の関連する語句に着目して、内容について正しく読み取ることができる。(ウ①理解の能力)
- (3) 読んだ内容について、概要や要点を把握することができる。(ウ②理解の能力)
- (4) 情報を読み手にわかりやすく伝えるための文章構成について理解している。(エ. 知識・理解)

V. 本時のねらい

- (1) 文章を構成する情報がそれぞれどのように関連しているか、読みとることができる。
- (2) 段落構成をわかりやすく説明するための連結表現とその用法を理解している。

VI. 授業展開過程

時間	学習内容および活動	指導上の留意点	評価規準との関連・評価方法
10 5 15	Warm-up How to Use Context Clues 演習 Presentation of the new material 単語の確認・音読 Comprehension 本文のテープリスニング ①本文の概要をまとめる。 ②段落内の情報構成に注目させ、筆者の主張の展開の仕方に注目させる。 ③「実年齢」と「職務年齢」の違いを、本文中の言い換え表現に注目させながらまとめる。	前時までに習得した文脈の活かし方を意識させるよう留意する。 ある単語がわからなくても他のところにあるヒントを活かせることに気づかせる。	ア観察 ウ①② 観察 ワークシート

時間	学習内容および活動	指導上の留意点	評価規準との関連・評価方法
20	<p>Practice 教科書本文と同程度の分量の文章を題材に、段落構成に注目しながら読解する。</p> <p>Consolidation 本時で学んだことを整理し、宿題の指示を出す。</p>	<p>文単位以上の情報に注目できるよう、既習の語彙に限定した長文を用意する。</p>	<p>ウ①② 観察 ワークシート</p> <p>エ ワークシート</p>

Warm-up 活動の資料

参考資料：Reading Power および More Reading Power

How to Use Context Clues

Reading 2006.9.29.

Guess the meanings of the undelined words in the following sentences. Answer in Japanese.

1 (Reason / Result)

a. He was so impudent to his mother that I would have *spanked him if he talked to me that way.

2 (Contrast)

～のおしりをひっぱたく

b. He is usually loquacious, but tonight he's rather silent.

3 (Example)

c. Carnegie was very frugal. Even though he earned little, he saved most of his money and lived on very little until he saved \$10,000 for the *investment (投資) that was to make him rich.

4 (Paraphrase)

d. I always felt the rapport between us was good, based on a relationship of trust.

Exercises : Guess what word(s) you need to finish the statements.

- Some plants grow in very dry places. These desert plants can live for a long time with no (water).
- People used to learn the news from the newspaper. But today, many people do not read the paper. They prefer to learn the news (on TV / from TV programs).
- Whales are the largest animals. But they eat very tiny fish and sea plants. That means they must (eat a lot).
- In a civil war, people in the same country fight each other. This can be the most terrible kind of war. Sometimes even people from the same family (fight each other).

指導案と指導資料からわかるように、文単位で行った演習の内容が、段落構成の説明にも活かされるように授業を計画した。また、キーワードが繰り返し言い換えられて出てきていることにも注目させ、わからない語彙があっても、文章全体を読むことで理解が可能になることにも留意したい。

6. おわりに

単語知識の乏しい生徒が、あまりにボトムアップ処理にこだわるあまり、トップダウン的読解方略が働いていない珍解答をみかけたことが本稿での考察をまとめるきっかけの1つとなったが、2007年1月に実施された大学入試センター試験の英語の問題では、文章中の語の意味を、文章全体から推測するタイプの問題も新たに出题され、文脈による推測の重要性は今後ますます高等学校の現場でも強調されることであろう。しかしながら、ボトムアップ処理の過程で、未知語が多いと負荷がかかりすぎて文脈も活かせず、英語学習＝辞書での調べ学習、で終わる高校生も多いと思われる。今後、このような実践がセンター試験対策とともに広く行われ、文脈を活かす技能を身につけた高校生が増えることを期待する。

本稿では、文章構成を手がかりに精読する技能を鍛え

る方法を提案したが、読解の真の目的は、文章の内容を理解することにある。文章構成の知識を身につけることに終始しては本末転倒である。また、背景知識を活かせば、キーワードから文意を見いだすことも可能なため、単語→文→段落→文章のように直線的に思考することにこだわる生徒を生み出すことになってもいけない。読解技能の全体を見渡しつつ、テキストタイプに応じて、必要な方略を適切に利用できる生徒を育てることを目標に、本稿で考察したことを活かしていかなければならない。

7. 参考文献

- Adams, W. R. (1989) *Developing Reading Versatility*. Holt, Rinehar and Winston, Inc.
- Mikulecky, B. S. and Jeffries, L. (1986) *Reading Power*. Addison-Wesley Publishing Company.
- Mikulecky, B. S. and Jeffries, L. (1996) *More Reading Power*. Addison-Wesley Publishing Company.
- Ommagio, A. C. (1986) *Teaching Language in Context*. Heinle and Heinle Publishers.
- 天満美智子他 (2002) 『英文読解のプロセスと指導』大修館書店